

「戦争と平和！」

第5回

19歳で逝った義兄

高瀬 浩衣

「この人はだあれ」と幼い孫は仏壇に手を合わせて写真を指差して尋ねました。「19歳で戦争で亡くなったじいじのお兄さん」「お兄さん？」不思議そうに聞き返した孫も19歳になりました。凛々しく立つ写真は江田島海軍兵学校を昭和19年3月に卒業した時の義兄です。夫は15歳も年が離れていたので兄の記憶はないと言いますが、両親と富山から汽車に乗り江田島まで兄とのお別れの面会に行ったことの微かな思い出はあるようです。

亡き両親は仏壇の引き出しに義兄の写真、手紙などを保管し、また親同士が決めた許嫁が描いた油絵の義兄の肖像画、床の間には辞世の句を掛けていました。「桜咲く国に生まれて散る春を」19歳になったばかりの若者が南洋に向かう前に死を覚悟してこのような辞世の句を残しています。

次の文は義兄と海軍兵学校の同期の方の手記より。

次の文は義兄と海軍兵学校の同期の方の手記より。

【昭和16年12月1日、第73期生として憧れの江田島の海軍兵学校に入校、その1週間後に大東亜戦争の開戦を迎えた。3年間の教育を2年4カ月に短縮されて血の出るような猛特訓を受け、昭和19年3月22日に卒業した。勇躍第一線にはせ参じた時は戦争も末期の頃でした】

義兄も第73期生として卒業。19歳になったばかりでした。大日本帝国海軍の水上機母艦、航空母艦「千歳」の艦長付きの少尉として任務につきフィリピン沖に向かいます。

【千歳は昭和19年6月マリアナ沖海戦に参加。次いで10月25日のレイテ沖海戦にも参加したが米空母艦載機の攻撃を受けて撃沈された。艦長以下903名の乗員が命を落とした（千歳の歴史より）】その中に義兄もいました。

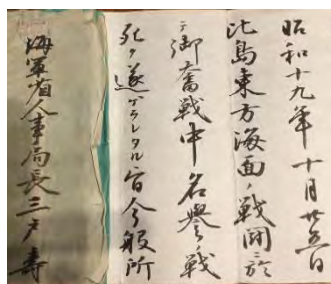
巻紙に筆で書かれた手紙が残されています、「私儀既に艦に慣れ専心ご奉公致居候間何卒ご安心ください～」



義兄から家族への手紙

尚書くべきこと多くありたる如く思ふもいざ筆を取れば漠として浮かばず家中皆様のご健康を遥かに祈上候～」
妹たち、幼い弟にも元気であるようにと書かれていました。また海軍の印のある葉書では「いろいろ面白い話がありますが手紙は具合が悪いです。命が長かったら話をしませう」話をする機会もなく10月25日に艦とともに命を落しました。

昭和20年1月26日付けで海軍省局長からの戦死広報が届いています。19歳の第1子を亡くした両親の悲



戦死広報

しみはいか程であったかと思えます。当時の日本には想像を絶するほどの数の家族が同じ悲しみを持ちながら生きてきたことでしょう。

6月23日沖縄終戦慰霊の日に女子中学生の凛とした自分の言葉での「生きる」の朗読には心打られました。

みんな生きていたのだ・・・家族がいて、仲間がいて、恋人がいた・・・それなのに、壊されて、奪われた。生きた時代が違う、ただそれだけで。無辜の命を。【むこ・何の罪のない事】

あたり前に生きていた、あの日々を・・・私が生きている限り、こんなにもたくさんの命を犠牲にした戦争を、絶対に許さないことを・・・今と一緒に生きているのだ、だからわかるはずなんだ。戦争の無意味さを、本当の平和を。頭じゃなくて、その心で。戦力という愚かな力を持つことで、得られる平和など、本当は無いことを。平和とは、当たり前前に生きること。・・・

戦争の記憶のない我々ですが子や孫たちにはこの詩と共に我が家の戦争史を伝えらえる、よい機会かと思い記しました。

